

近世

16世紀後半

19世紀後半

ゆるやかなお金の統一

Toward the Unification of Currency

江戸時代、幕府により金貨・銀貨・銭貨が発行され、それまでの中国の銭貨に代わり、日本独自のお金が全国で流通するようになりました。地域によって主に使われるお金は異なり、藩札などの紙幣がその地域だけで使われることもありました。

江戸時代後半になると、商品作物の生産が盛んになるとともに、小額面のお金が普及し、農村でも広くお金が使われるようになっていきました。

Early Modern Times From the late 16th century to the late 19th century

During the Edo Era (1603-1867), the Shogunate issued gold, silver, and copper coins. As a result, Japanese coins superseded the Chinese coins that were in use. The currency in circulation differed region to region and in some areas paper money such as clan notes were circulated.

In the middle of the 18th century, the use of money in small denominations spread, and money came into widespread use even in rural villages.

戦国・安土桃山時代

Sengoku Era

16世紀 半ば
Mid-16th century

金貨・銀貨の登場

Introduction of gold and silver coins

17世紀 前半
Early 17th century

幕府による金貨・銀貨・銭貨の発行
Issuance of coins by the Shogunate

18世紀 前半
Early 18th century

藩札発行の広まり
Issuance of clan notes

江戸時代

Edo Era

18世紀 後半
Late 18th century

計数銀貨の登場
Issuance of silver coins as denominated currency

19世紀 半ば
Mid-19th century

開港後の通貨の混乱
Currencies in disarray after the opening of the treaty ports

近世

Early Modern Times

近世

16世紀後半～19世紀後半



ゆるやかなお金の統一
Toward the Unification of Currency

江戸時代、幕府により金貨・銀貨・銭貨が発行され、それまでの中国の銭貨に代わり、日本独自のお金が全国で流通するようになりました。地域によって主に使われるお金は異なり、藩札などの紙幣がその地域だけで使われることもありました。

金銀を掘る

鉱山開発と精錬技術の発達

徳川幕府の治世下で、金・銀の産出量は増加し、金・銀の流通も盛んになりました。

貨幣天下統一

貨幣天下統一の達成による金貨の流通

金貨の流通

海外へ出た金銀銅

海外へ出た金銀銅

物流を支えたお金

改鑄

庶民のお金

1 金銀を掘る

鉱山開発と精錬技術の発達

Mining Gold and Silver



鉱山開発と金貨・銀貨

Mining Development for Gold and Silver Coins

16 世紀、日本国内における金銀の生産量は鉱山開発と技術革新により飛躍的に増大し、銀は海外へも輸出されるようになった。

金貨・銀貨が登場し、軍資金として蓄えられるとともに高額取引に利用されるようになり、次第に金銀が貨幣として広く使われるようになった。

〔16世紀の鉱山開発〕

Mining Development in the 16th Century

石見銀山は、新しい精錬技術（灰吹法）を導入し、国内の鉱山開発の先駆けとなった。戦国大名は、石見銀山の開発をきっかけとして各地で鉱山を開発した。



「ティセラ日本図」
島根県立古代出雲歴史博物館蔵

石見銀山産の銀は、海外にも輸出された。当時の海外の地図には、石見の地名がみられる。

銀貨

中世には、銀は海外から輸入されていたが、16世紀に入ると国内の生産が増え、輸出されるようになった。銀鉱山は石見や生野など西日本に多く分布し、西日本では銀貨が広く使われた。



石州銀
Sekishugin (Silver)
16世紀

石見銀山産の銀でつくられた銀貨。銀山をめぐる大名が争奪戦を繰り返した。



筑前博多御公用銀
Chikuzen Hakata Gokuyogin (Silver)
16世紀



加賀花降銀
Kaga Hanafurigin (Silver)
16～17世紀

m e m o

重さをはかって使うお金 切って使うお金

最初につくられた金貨・銀貨は、重さが一定でなく、使う際に重さをはかり、必要な重さに切って使われる秤量貨幣であった。宣教師ルイス・フロイス（1563年来日）は「日本では切片の重さをはかって通用している」（『日本覚書』）と記している。



〔豊臣期大坂図屏風〕

重さをはかって両替をする様子
エッゲンベルク城所蔵（世界遺産／オーストリア）
画像提供：関西大学なにわ大阪研究センター

金貨や銀貨の一部が切り取られている



御公用銀
16世紀



蛭藻金
16世紀

金貨

金は、古代から中世にかけて、自然金（砂金など）のまま使われた。金鉱山は伊豆や甲斐など主に東日本に多く分布していた。板状につくられた金貨は、初めは武家同士の贈答のなかで使われた。



砂金
Gold Dust

精錬の必要がない品位の高い金。重さをはかって使われた。



自然金
Gold Nugget



甲州金（露一両金）
Koshukin (Gold)
16世紀

甲斐（現・山梨県）でつくられた金貨。武田氏は領内の金山開発を進めた。



越座金
Etsuzakin (Gold)
16世紀

越後（現・新潟県）でつくられた金貨。上杉氏は領内に金山を持ち、金貨をつくらせた。



蛭藻金
Hirumokin (Gold)
16世紀



譲葉金
Yuzuribakin (Gold)
16世紀



円歩金
Embukin (Gold)
16世紀



天正大判（天正菱大判）
Tensho Hishi Oban (Gold)
16世紀

豊臣秀吉が彫金師の後藤家につくらせた最初の大判。重さ「拾両」（10両＝約165g）、製作者「後藤」の花押（サイン）が墨書されている。



「分銅金」とは？

What Are Fundokin Gold Ingots?

備 蓄などのために16～17世紀に分銅の形につくられた金塊には、小型の小分銅と大型の大分銅があった。当館では4種類の小分銅を所蔵し、いずれも金の品位は約95%、重さは約375 g (100匁) である。



原寸

極 印：吉
地 紋：布目
金品位：94～96%



原寸

極 印：桐
地 紋：菊花
金品位：95～96%



原寸

極 印：亀甲桐
地 紋：布目
金品位：95～96%



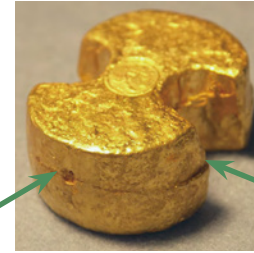
原寸

極 印：定
地 紋：石目
金品位：95～96%



小分銅は、溶かした金を型に流して固める「鑄造」と、表面に彫刻をする「彫金」によりつくられている。

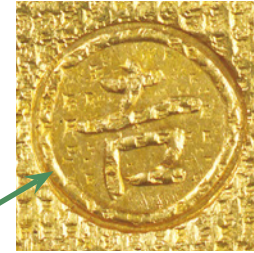
鑄造技術



溶かした金を鑄型に
流し込んだときの跡

鑄型の合わせ目から
はみ出た部分

彫金技術



地紋を打ったあと、中央に「吉」の
極印を打っている。



はじめに中央の「亀甲桐」の極印を
打ってから、地紋を打っている。



貨幣天下統一

約650年ぶりの国家によるお金の発行

Re-start of Coinage by the State After Roughly 650 Years



貨幣統一への道のり—金貨・銀貨・銭貨—

The Unification of Money: Gold, Silver and Copper Coins

徳 川家康は、全国のお金山を直轄化するとともに、貨幣をつくる技術を管理し、金貨・銀貨の製造体制を整備した。そして、国家として約650年ぶりに、大きさ・重さ・品位（金銀の含有率）などを統一した金貨と銀貨を発行した。中世から引き続き使われていた銭貨は、江戸幕府が発行した寛永通宝に統一された。

16世紀の金貨・銀貨

盛んになった鉱山開発を背景として各地の大名によって金貨・銀貨がつけられた。



露一両金

角一分金

一分朱中糸目金



裏

甲州金

Koshukin (Gold)

甲斐（現・山梨県）でつくられた金貨。甲州金には、4進法の貨幣単位（1両＝4分＝16朱）が使われた。

額一分金

Gaku Ichibukin (Gold)

家康が発行したとされる。



武蔵墨書小判

Musashi Sumigaki Koban (Gold)

家康が自らの領国で発行したとされる。



天正大判

Tensho Oban (Gold)

豊臣秀吉が彫金師後藤家に命じてつくらせた。



大黒くくり袴丁銀

Daikoku Kukuribakama Chogin (Silver)

湯浅作兵衛（後の大黒常足）がつくったとされる。

徳川家・江戸幕府発行の金貨・銀貨

幕府の設立を目指していた家康は、16世紀末に関東の自らの領国で発行していた貨幣を引き継いで全国で流通する金貨をつくった。

一方、西日本では銀貨が広く流通していたため、銀貨も発行した。（慶長金銀の発行 1601年）



裏

慶長一分金

Keicho Ichibukin (Gold)

額一分金の形状にならってつくられた。



裏

慶長小判

Keicho Koban (Gold)

額面などを墨書から極印に変えることで小判の量産が可能になった。



慶長大判

Keicho Oban (Gold)

天正大判の形状を引き継ぎ、家康が後藤家に命じてつくらせた。



慶長丁銀・豆板銀

Keicho Chogin and Keicho Mameitagin (Silver)

家康から大黒の姓を与えられた湯浅作兵衛（大黒常足）が製造にあたった。

中国の銭貨流通圏からの自立

1636年に江戸幕府は寛永通宝を発行し、1670年には寛永通宝以外の銭貨の使用を禁止した。

日本では、国家が基準となる金貨・銀貨・銭貨を制定し、独自の貨幣を使うようになった。



寛永通宝

Kan'ei Tsuho (Copper)

1636年

渡来銭と同じ形状（円形方孔）で、独自の銭名を持つ。当時、東アジアで流通していた銭貨のなかでも寛永通宝は銅を多く含み、良質であった。

memo

三貨制度—金貨・銀貨・銭貨—

幕府は、各地で流通していたさまざまな貨幣の実態をふまえ、金貨・銀貨・銭貨からなる貨幣制度を定めた。



金貨

1枚の価値が定められた計数貨幣で、小判1枚＝1両とし、4進法（1両＝4分＝16朱）に基づく。

《江戸時代初期の公定相場》

金貨 1両 = 銀貨 50匁 = 銭貨 4,000文

銀貨

重さの単位である匁を基準とする秤量貨幣（使用する際に重さをはかって使う貨幣）で、1匁（3.75g）＝10分として使われた。

銭貨

1枚の価値が定められた計数貨幣で、1枚＝1文として使われた。

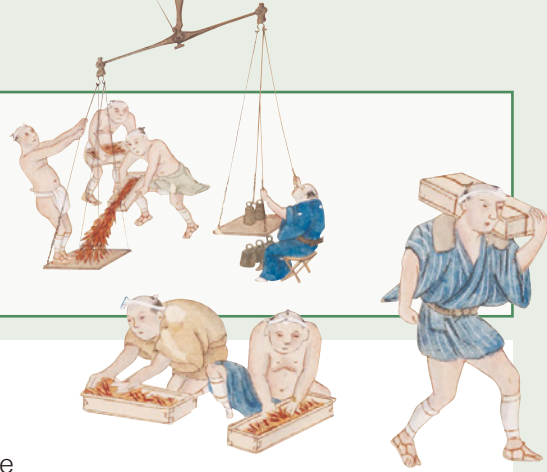
1,000文＝1貫文

4

海外へ出た金銀銅

お金の材料の海外流出

Outflow of Gold, Silver and Copper



幕府による貿易とお金の材料の統制

Control of External Trade and Materials for Money by the Shogunate

江戸幕府は、自らの管理のもとで貿易を行った。17世紀の日本は、中国から生糸や絹織物、砂糖などを輸入する一方、主に金銀銅などの金属を輸出した。

銀の輸出

16世紀後半から17世紀初めにかけて、主に中国に向けて大量の銀が輸出された。幕府は国内の銀貨不足を防ぐため、1668年に銀の輸出を禁止した。

〔銀貨の輸出〕 Export of *Chogin* Silver Coins

長崎での中国やオランダなどとの貿易のほか、対馬藩と朝鮮、薩摩藩と琉球を通じて主に中国に向けて銀が輸出された。



慶長丁銀
Keicho Chogin (Silver)
1601年
品位80%

当初は慶長丁銀より純度の高い灰吹銀の輸出量が多かったが、幕府はその後、慶長丁銀以外の銀の輸出を禁止した。



宝永丁銀（二ツ宝丁銀）
Hoei Chogin (Silver)
1706年
品位50%

対馬藩は薬用人参などの輸入代金を慶長丁銀で支払っていたが、その後発行された宝永丁銀は、質が悪く受け取りを拒否された。輸入代金の支払いのため、慶長丁銀と同等の質の良い銀貨（人参代往古銀）がつけられた。



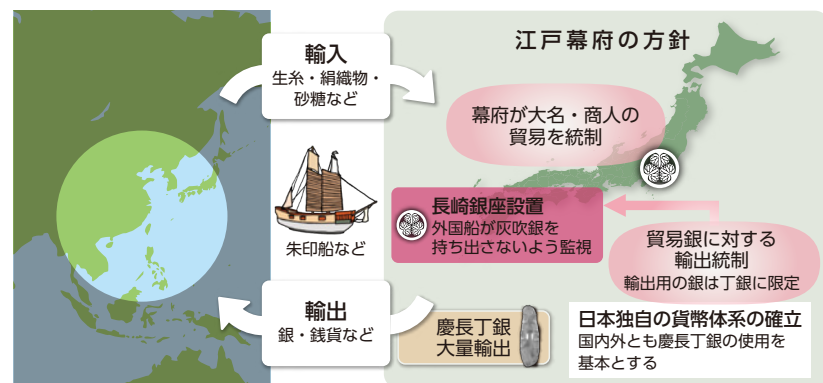
人参代往古銀
Ninjindai Okogin Coin
for Import of Korean
Ginseng (Silver)
1710年
品位80%

原寸

m e m o

江戸時代初期の貿易と銀

幕府は純度の高い灰吹銀の海外流出を防ぎ、輸出用の銀を幕府発行の丁銀に限定するために、長崎に銀座を設置し、貿易を監視した。



銅の輸出

〔銅銭・棹銅の輸出〕

Export of Copper Coins and Copper Ingots

江戸時代初期、銅の地金や大量の銅銭が東南アジアなどへ輸出された。

幕府は寛永通宝発行のため材料となる銅の輸出を禁止したが、後に再び輸出を許可した。

◆オランダ船による銭貨輸出

1630年代に平戸におかれたオランダ商館の帳簿には、大量の銭貨を輸出していた記録がみられる。



寛永通宝
Kan'ei Tsuho (Copper)
1636年

幕府は寛永通宝発行の翌1637年に銅の輸出を禁止した。



長崎貿易銭
Nagasaki Boeki Coins for Trade (Copper)
1659～1685年

長崎で貿易用につくられた銭貨。中国の銭貨と同じ銘が使われているが、書体が異なる。



〔唐蘭館絵巻〕長崎歴史文化博物館蔵

長崎出島で棹銅を計量し輸出する場面

A Scene of Exporting Copper Ingots

寛永通宝の発行から10年後の1646年に銅の輸出が再開された。その後も寛永通宝の輸出は禁止され、銅は棹銅（銅地金）の形で輸出された。



棹銅（複製）
Saodo Copper Ingots
原資料：住友史料館蔵

輸出用の銅地金。棒状で純度が高く赤みを帯びている。大坂でつくられ長崎から輸出された。

金の輸出

幕府が1660年代にオランダ船に対して小判の輸出を許可すると、東南アジアなどに向けて小判が輸出されるようになった。その後、小判に含まれる金の量が減ると輸出は減少した。

〔小判の輸出〕 Export of *Koban* Gold Coins



慶長小判
Keicho Koban (Gold)
1601年
品位84% 18g



元禄小判
Genroku Koban (Gold)
1695年
品位57% 18g



宝永小判
Hoei Koban (Gold)
1710年
品位84% 9g

幕府は慶長小判よりも純度の低い元禄小判を発行した後、輸出を元禄小判に限定し、慶長小判と同じ価格で輸出するようオランダ側に命じた。軽くなった宝永小判も同じ価格での輸出を命じたことなどにより、輸出高は減少に向かった。

◆金銀の輸出国から輸入国へ

18世紀に入ると幕府は、金銀が国外に流出するのを防ぐため、甘藷、砂糖、朝鮮人参などの輸入品の国産化を進めた。18世紀後半には、銅の地金のほか、海産物の輸出を増やし、貨幣の材料となる金銀の輸入を開始した。

物流を支えたお金

全国をかけめぐる物とお金

Money Promotes Commercial Activities

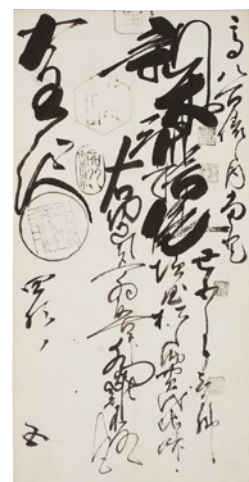
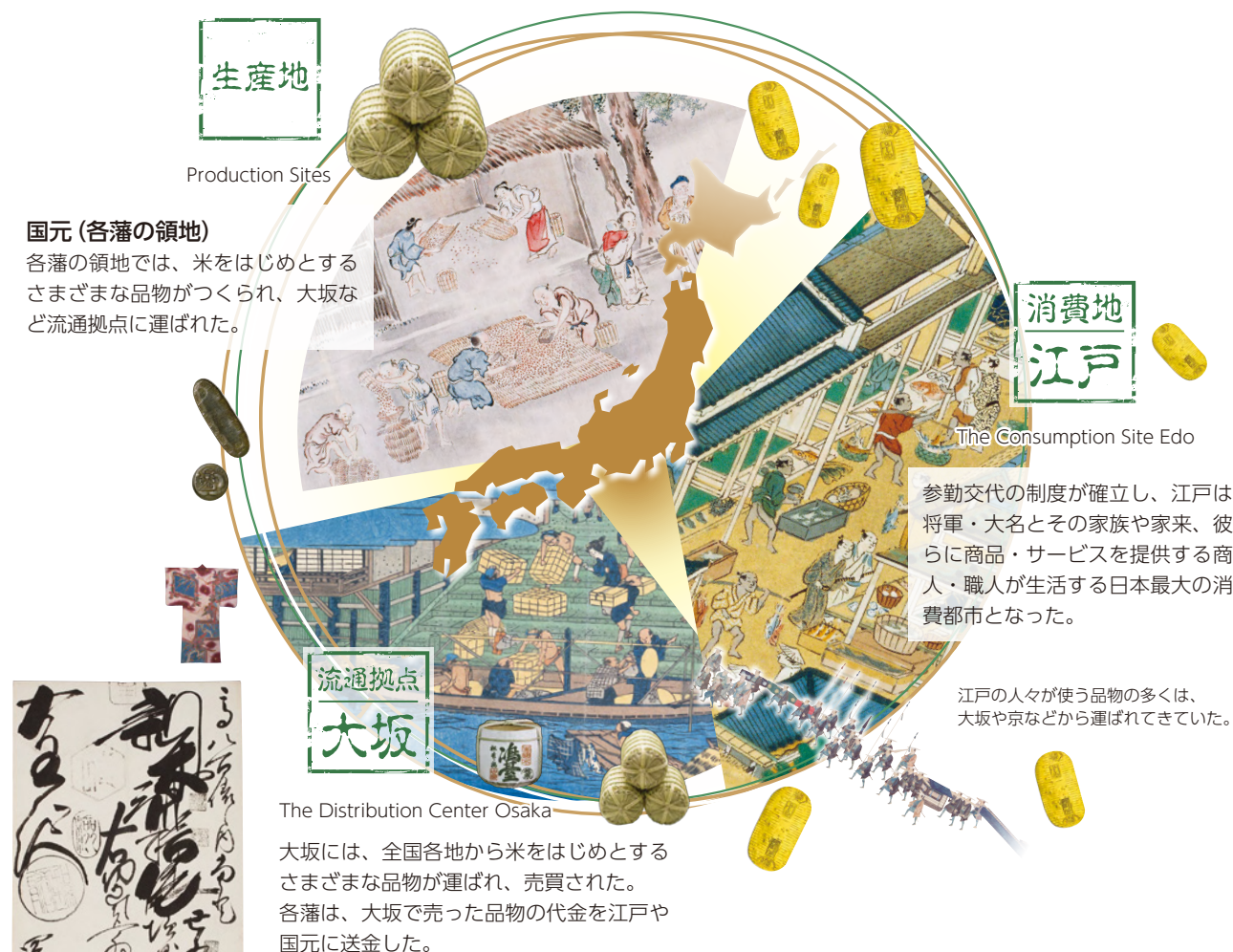
金は天下のまわりもの

Money Comes and Goes

幕 藩体制のもとで米をはじめとする全国的な商品流通が活発になり、幕府が発行した金貨・銀貨・銭貨と両替屋の信用がこれを支えた。都市で生活する人々にとって、貨幣は必要不可欠なものであった。

全国市場の形成

各藩の領地で生産された米は、年貢として藩に納められた後、大坂をはじめとする流通拠点で換金されて参勤交代や江戸藩邸での費用などにあてられた。消費都市の江戸、流通拠点の大坂、手工業の先進地である京は三都とよばれた。三都間および三都と各地の間は街道や航路で結ばれ、全国的な商品と情報の流れが活発になっていった。



米切手 加賀藩

Rice Certificate Issued by the Kaga Clan

各藩は米を売却する際に、米を渡す代わりに米との引替えを約束した「米切手」を発行した。米切手は米市場でさかんに取り引され、米切手を質にとってお金を貸す両替屋もいた。

m e m o

金遣い・銀遣い・銭遣い

高額取引については、江戸を中心とする東日本では金の単位(両・分・朱)で、大坂を中心とする西日本や北陸では銀の単位(貫・匁・分)で、価値が表示されることが多かった。
小額取引では、全国的に銭貨の単位(文)が用いられた。東北や西日本では高額取引にも銭貨の単位が用いられることがあった。

両替屋の金融力

Financial Power of the Moneychangers

両替屋の信用

Credibility of the Moneychangers

両 替屋(両替商)は、貨幣の両替を行うとともに、顧客から預金を受け入れ、遠隔地間で資金のやりとりをする際に現金輸送に代えて為替を取り組んだ。各藩や商人に対する貸出などの金融サービスを提供し、江戸時代の活発な商品流通を支えた。

両替屋が関わったさまざまな取引

両替屋の信用に基づき、紙に書かれた書類(手形など)のやりとりや帳簿上の取引により、金属の貨幣を使わなくても商品の売買や資金の貸し借りができるようになっていった。

〔藩札の発行と両替屋〕

The Issuance of Clan Notes and Moneychangers

両替屋の中には、大名など領主の御用商人として、年貢米や専売品の流通に関わる者もいた。必要に応じて領主への貸出を行い、藩札の発行を請け負うこともあった。

〔包金銀に信用を与えた両替屋〕

Packages of Gold and Silver Coins Authorized by Moneychangers

金座・銀座や両替屋が一定量の金貨・銀貨を和紙で包み封印を施した包金銀は、贈答の場面で使われた。



紀伊和歌山藩
松坂飛地札



播磨明石藩札



備中足守藩札



銀五百匁包



二分金五十両包

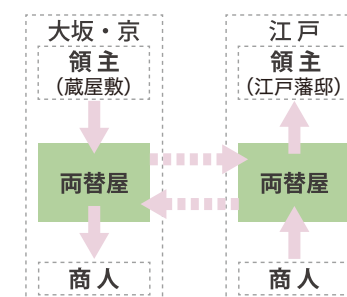
包み紙には、金額とともに封をした者の署名、捺印があり、その信用によって封を切らずに授受された。

m e m o

お金の流れを支えた両替屋

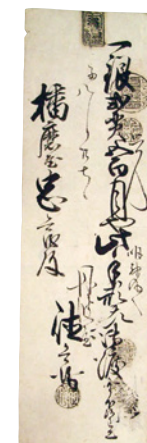
江戸と大坂・京の間の送金

江戸と大坂・京に店を構えた両替屋は、領主が大坂で売却した年貢米などの代金を江戸に送金する一方、大坂・京から江戸に送られたさまざまな商品の代金を大坂・京に送金した。



→ 実際のお金の流れ
--- 相殺されるお金の流れ

両替屋は、大坂の蔵屋敷から江戸藩邸に送られる年貢米の売却代金と、江戸の商人から大坂・京の商人に送られるさまざまな商品の売上代金を相殺した。これにより、金貨・銀貨を運ぶ手間を省いた。



大坂の振手形

大坂の町人は、両替屋への預金をもとに「振手形」を発行し、現金の代わりとして支払いに使用した。

7 両替屋のしごと

Services Provided by the Moneychangers

両替とは？

Exchange of Money

大 坂・江戸・京を中心とする両替屋は、三貨制度のもとで発行されていた異なる種類の貨幣の交換を行った。

町の両替屋

町角や橋のたもとなど人が多く集まる場所には両替屋が店を開いた。町でお金を使う人々は手持ちの金貨・銀貨をそこで銭貨に両替した。



「銭小うり」看板のある両替屋
Moneychanger's Sign "Copper Coins on Sale"

両替屋は、それ以外の商売を兼ねることも多かった。全国の城下町や宿場町などにも両替屋ができ、多くは、商人・宿屋などを兼ねていた。

【両替屋の道具】 Moneychanger's Tools



天秤
Scales

丁銀は重さをはかって使う貨幣であり、両替には天秤と分銅が不可欠であった。



分銅
Weights

天秤で重さをはかるとき、重さの標準として用いるおもり。



天秤のある両替屋

「江戸図屏風」(部分)
国立歴史民俗博物館蔵



銭の積まれた両替屋

「洛中洛外図屏風」(舟木本) (部分)
東京国立博物館蔵
Image: TNM Image Archives

両替屋と金銀銭の相場

幕府は、金銀銭の相場を定めたが、実際の相場は、金(両)建ての江戸と銀(匁)建ての大坂・京の間の物資の流通や貨幣改鋳などの要因によって日々変動した。大坂の有力な両替屋の間で金銀銭を交換するときの相場が、各地の基準となった。

金貨・銀貨・銭貨の公定相場 Exchange Rates for Gold, Silver and Copper Money

幕府は、貨幣を安定的に流通させるため、金貨・銀貨・銭貨の間で交換比率を定めた。

1609年 金1両=銀50匁=銭4貫文
1700年 金1両=銀60匁=銭4貫文
1842年 金1両=銀60匁=銭6貫500文

公定相場 (1700年)

金貨(計数貨幣)
1両=4分=16朱



金貨1両

銀貨(秤量貨幣)
1匁=10分 1,000匁=1貫(貫目・貫匁)



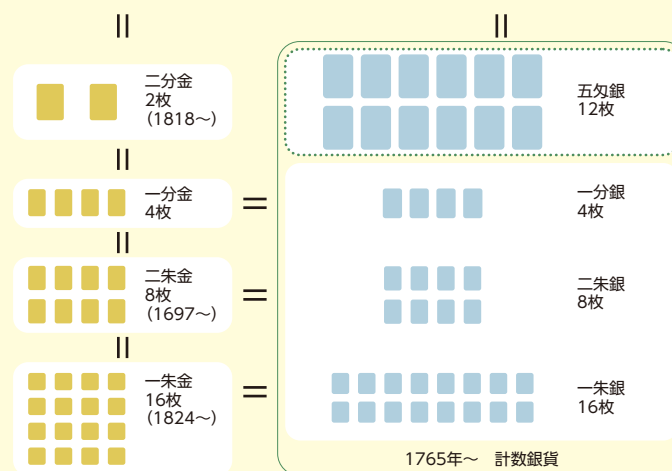
丁銀・豆板銀

銀貨60匁

銭貨(計数貨幣)
1貫=1,000文



銭貨4,000枚
銭貨4貫文=4,000文



18世紀後半、幕府が両建ての計数銀貨を発行するようになると、匁建ての秤量銀貨はほとんど流通しなくなった。それでも、大坂を中心とする両替屋や商人たちは、明治時代初めまで銀貨の単位である匁建て(銀目)で商品の売買や資金の貸し借りなどの取引を行っていた。

両替屋の看板

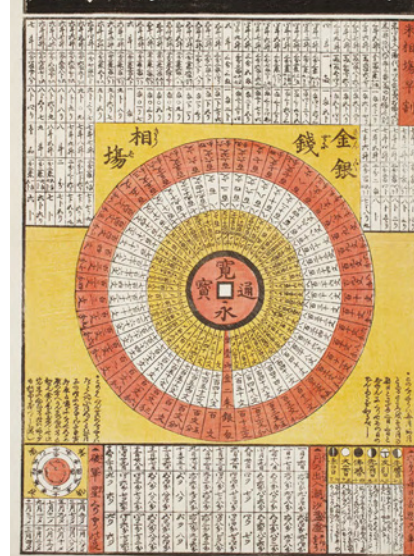
Moneychanger's Sign
両替屋で使う分銅の形をした看板。



千両箱

Chest Containing a Thousand Pieces of Gold Coins
小判1両×1,000枚=「千両」が入ることに由来するが、小判以外の金貨・銀貨や、500両や1,000両以上入るものもあり、大きさや形はさまざまである。

見早場相銭庭相米



銭相場早見

A Simplified Chart of Exchange Rates for Rice and Coins

「米相庭銭相場早見」